イスラエル鉄器時代出土土器に見られる 「生命の木」の意義

Significance of the “Tree of Life” Decoration on Iron Age Pottery from Israel

杉本智俊^{*}
SUGIMOTO, David T.

ABSTRACT This article aims at clarifying the significance of the “tree of life” decoration engraved or painted on large jars recently found from Iron Age strata in Israel. They are anomalies because most Iron Age pottery is red washed with little paint or engraving. During the Late Bronze Age a “tree of life” decoration appears quite often on the pottery, and at first glance these Iron Age decorations appear to suggest the continuation of the Canaanite tradition of a fertility goddess and a polytheistic worldview. However, the writer shows that with the passage of time the meaning of the “tree of life” changed from representing a fertility goddess to representing the blessings of Yahweh on the basis of (1) a study of the change in the symbolic world of the “tree of life” as reflected in iconographic artifacts from MBII to Iron Age IIC, and (2) interpretation of inscriptions and drawings from Kuntilet ‘Ajrud.

序 論

イスラエル考古学では、後期青銅器時代の在地土器に赤黒二彩あるいは単彩で定型的な図像が描かれたものが頻繁に見られる（図1参照⁽¹⁾）。このうちもっとも広く用いられたモチーフは、いわゆる「生命の木」の図像で、垂直に立った幹の頂上部から葉が広がった木が描かれている。この木の周囲にはかもしかや鳥が配されることも多く、水が蛇行する線で描かれることもある。これらは、豊穡女神の祝福の象徴と理解されることが多い。一方、鉄器時代になるとこうした彩文土器は消失し、赤色化粧土を全面に施した無文の土器が主流となる⁽²⁾。

ところが、近年こうした理解と整合しない遺物、すなわち鉄器時代の土器に

^{*} 慶應義塾大学教授
Professor, Keio University

「生命の木」が描かれたものが数点出土しており、これらをどう理解すべきかが課題となっている。具体的には、以下の3点である。

1. テル・レヘシュ出土の大型の甕の把手に「生命の木」が刻線されたもの（図2-a, 前11世紀, C2地区。桑原 2008, 図8⁽³⁾参照）。
2. エルサレム, オフェル出土の大型の甕の肩部に「生命の木」が刻線されたもの（図2-b, 前7世紀?。E. Mazar 2002, 13右上⁽⁴⁾参照）。
3. ネゲブ砂漠とシナイ砂漠の中間地点に位置するクンティレト・アジュール出土の甕に「生命の木」ほか多数の図像と碑文が記されたもの（図9, 前8世紀。Beck 1982, fig. 4参照）。

特にクンティレト・アジュール出土の土器には「ヤハウエとそのアシェラによってあなた（がた）を祝福した」という碑文も記されており、アシェラはカナンの豊穡女神の名として知られていることから、これはイスラエルの王国時代（ユダ王国）にカナンの豊穡女神崇拜が継続していたことの証拠とされることがしばしばある。また、ヤハウエとアシェラの組み合わせから、ヤハウエはアシェラを配偶神としており、イスラエルは王国時代末期まで多神教的だったことの証拠とされることもある⁽⁵⁾。

しかし、これら鉄器時代Ⅱ期の土器の図像は、本当に後期青銅器時代の女神崇拜が継続していた証拠となりうるのだろうか⁽⁶⁾。そのためには、「生命の木」の表象世界が、時代毎にどのような意味を持っていたのかを厳密に検討することが必要とされるはずである。本稿では、以下の2つの視点から「生命の木」の意味の変遷を検討したい。1. 土器以外のものも含めた時代毎の考古遺物の全体像から、図像学的に「生命の木」の変化を跡づけ、その枠組みの中にこれらの土器を位置づけること、2. クンティレト・アジュールの土器に記された「ヤハウエとそのアシェラ」という碑文の意味を検討すること、である。こうした研究は、イスラエルにおける宗教観の変化、とりわけ一神教的世界観と多神教的世界観の関わりを垣間見る貴重な機会となると考えられる。

I. 南レヴァントにおける「生命の木」の図像の時代毎の変化

南レヴァントにおける「生命の木」の図像に関しては、ウィンター（Winter 1986）、シュロアー（Schroer 1987）、フレーヴェル（Frevel 1995）など分厚い研究の蓄積があり、特に後期青銅器時代-鉄器時代Ⅰ期の土器に描かれた図像

に関しては、最近チョイ（2008）が博士論文を仕上げている。これらのうち、もっとも広く受け入れられている研究はケール（Keel 1998）のものなので、⁽⁷⁾ここではそれを基本に時代毎の「生命の木」の描かれ方を理解したい。

1. 中期青銅器時代 IIB 期-後期青銅器時代（カナン時代、前1800-1200年頃）

中期青銅器時代 IIB 期はカナンの都市国家群が確立した時代である。また、これらの都市の多くは後期青銅器時代末に壊滅的な打撃を受けるので、この間は基本的にカナン人の時代とみなすことができる。ケールは、この時代に「生命の木」のモチーフが、女性器のモチーフとともに豊穡女神の表象として用いられたことを以下の証拠から論じている。

1. 貴金属性ペンダント。図 3-a はテル・エル・アジュール出土の金箔製ペンダントで、ハトホル女神の髪型をした女性の頭部が描かれており、女性の陰部の上には木が認められる。これらは、一般に護符などとして用いられたと考えられており、女神、女性器、木に宗教的関連があったことを示している。同様の例は、ウガリト、カミド・エル・ロズ等からも出土している。⁽⁸⁾
2. スカラベ。この時代のレヴァント地方に特有のいわゆる「ヒクソス・スカラベ」には、しばしば性器を強調した女性像が木の枝に挟まれた状態で描かれている（例、図 3-b）。この図案は頻繁に認められるので、固定化されたテーマだったと考えられる。
3. テル・エル・アジュール出土の円筒印章。木の両側に有翼の人物が膝立してしている状況が描かれている。

ケールはこれらの表象は同時代あるいはそれ以前のメソポタミアの神話世界を背景にしているとし、マリやウルの例を指摘している。シリア砂漠東端にあったマリは、カナン人の形成にも影響があったとされるアモリ人の都市国家で、そのイシュタル神殿の壁画（図 4-a, 前1750年頃、中期青銅器時代 IIB 期と同時期）に「生命の木」が描かれていた。「生命の木」は神殿正面の図の両側に描かれており、その周囲に鳥や有翼の四足の動物が配されている。神殿の内側では、木の生えた壺から水が流れ出している。この神殿からは、同様の壺を持った女神像も出土しており、この時代マリではイシュタル女神と水、木、豊穡に関係があったことが理解できる。また、前2250-2150年頃のものと思われる

るマリ出土の円筒印章（図 4-b）には、山に座り、星の描かれた女神（おそらくイシュタル）の足元から水が流れ出し、木の枝がはえ出す姿が描かれている。同様の図案は、シュメル時代のウル出土の円筒印章にも見ることができる（図 4-c）。ウルの例は、ロゼッタ模様の葉や葦の束が描かれていることから、イナンナ（シュメル世界でイシュタル女神に対応する）女神が描かれていることがあきらかである。

このような理解は、さらに後期青銅器時代の出土遺物によっても支持される。ケールは以下の 3 点を指摘している。

1. ウガリト（前14-13世紀）出土の象牙製の蓋（図 5-a）。これには、山に座り胸をはだけた女神像が描かれており、左右にかもしかを配し、両手には木の枝（麦の穂？）を持っている。⁽⁹⁾
2. 長いハトホル女神の髪型をした裸体の女性土偶（図 5-b）。この土偶は南レヴァントの 3 箇所から出土しており、すべて同じ型で作られたものと思われる。⁽¹⁰⁾ 両胸に二人の乳児を収め、女性器を自分で開いており、「生命の木」とかもしかが両ももに彫られている。これらも、「生命の木」と女性器、豊穡の女神がセットで理解されていたことを示す例であろう。
3. ラキシユから出土した壺（図 1-b）。彩色でメノラ状の木とかもしか、ライオンなどが描かれており、その上に *mtn sy[l rb]ty 'lt* 「贈り物、私の[女主]人エラトへの捧げもの」という碑文が添えられていた。⁽¹¹⁾ エラトはカナンの主神エルの女性形で、配偶神である豊穡女神のことと考えられ、ウガリト神話のアシラト、聖書のアシェラの別名と理解されている。⁽¹²⁾

後期青銅器時代の南レヴァントからは、この他前述の通り「生命の木」のモチーフの描かれた大量の土器が出土する（図 1-a 参照）。⁽¹³⁾ これらの土器にはナツメヤシの木とかもしか、鳥、水（あるいは魚）の組み合わせが繰り返し描かれており、これらが固定化された図案だったことが知られる。ケールは、元来背の高いナツメヤシの樹液を動物が吸うことはありえず、そのように非現実的な図案が描かれていること自体これらが思想的な表現であることを示していると指摘している（1998, 30）。また、木から水や魚が垂れてくる図案もしばしば認められ、これも現実にはありえない描写といえる。⁽¹⁴⁾ こうした土器に見られる「生命の木」のモチーフは、あきらかに女神と関係する他の遺物

と共通すること、特にラキシシュ出土の壺でエラトと明記されていることから、豊穡女神となんらかの関係があって描かれた可能性が高いであろう。また、このモチーフが日常用の土器に頻繁に認められることから、「生命の木」の信仰は後期青銅器時代のカナンでかなりの広がりがあったものと理解することができる。

一方、これら大量の土器がすべて祭祀用具だったとはとても考えられない。「生命の木」の図案そのものも省略されたり雑に描かれることが多く、これらが女神自身の表現だったかどうかは確かでない。⁽¹⁵⁾ その背後に豊穡女神が意識されたことはあるだろうが、次第にその祝福の象徴程度の意味しかない装飾に変化した可能性もある。⁽¹⁶⁾ 後期青銅器時代の土器のモチーフを研究したチョイ(2008: 424)も、そのように結論づけている。

2. 鉄器時代 I-IIA 期（過渡期、前1200-900年頃）

前1200年から前900年頃は、カナン文化が消滅し、イスラエル王国が確立される過渡期とみなすことができる。出エジプト、イスラエル出現に関してどのような立場を取ったとしても、イスラエルとしての民族意識がこの頃までに確立されていたことはメルネプタハ碑文から一般に受け入れられている。一方、鉄器時代の初期にはイスラエルの物質文化は中央山地やトランスヨルダンに限定され、海岸平野やエズレル平野ではまだ後期青銅器時代と同じカナンの物質文化が継続していたとされる。前1000年頃にはダビデによるイスラエル統一王国が確立されるが、イスラエル独自の文化が形成される際、カナンの要素をどう咀嚼するかが課題だったと思われる。

ケールは、鉄器時代 I 期（前12-11世紀）には文化の変化と継続の両面が見られることを指摘している。鉢や調理鍋など日常用の土器の器形は継続するものの、輸入土器は消失し、後期青銅器時代の特徴だった彩文土器や「生命の木」の図像も激減する。この時代は資料自体が少ないが、「生命の木」の図像が継続する例として、ケールはタアナクやテル・エル・ファラ（南）（図 6-a）出土の印章とメギド VIA 層出土の彩文土器（図 6-b）を挙げている。彩文土器は二色彩文で「ペリシテ土器」とみなされることもあるが、右端に描かれている「生命の木」にむかってライオン、⁽¹⁷⁾ かもしか、魚、さそり、馬、竖琴奏者が行進するモチーフはむしろカナンの伝統に基づいている。

鉄器時代IIA期（前10世紀）にも「生命の木」の出土例は非常に少ない。しかし、ケールはベテルとベト・シメシュ出土のスカロポイド2点を挙げており（図7-a）、これらには「生命の木」の両側に人物（男性？）が立つ姿が描かれている。また、この時代に特徴的な遺物としてタアナク出土の土製祭儀台（前11-10世紀，図7-b）を指摘している。⁽¹⁸⁾これは4階建ての建物に似せて作られており、一階には裸体の女性像と両脇にライオン、二階には中央の窓と両脇にケルビム、三階にはかもしかが向かい合う「生命の木」と両脇にライオン、最上階には有翼日輪と馬、二本の柱とケルビムが描かれている。ヘストリン（1989）は、イスラエルの神ヤハウェがカナンの豊穡女神アシェラを配偶神とした姿をこの祭儀台は表現していると解釈した。ケルビムはヤハウェの契約の箱やエデンの園を守る存在として聖書に描かれており（創世記3：24；出エジプト記37：7-9；I列王記6：23-32，8：6-7）、ヤハウェも太陽に例えられることがあるからである。⁽¹⁹⁾また、ライオンは豊穡女神とともにしばしば登場する動物であり、女性像と生命の木の組み合わせは豊穡女神の表現としてすでに確立していたので、これは十分可能な解釈であろう。しかし、ケール（1998，41-42）やヘイドリー（2000，169-76）は、むしろヤハウェがカナンの豊穡女神から豊穡的な性格を取り込んだ姿を表現していると解釈している。祭儀台の図像だけから判断するとどちらの解釈も成立し⁽²⁰⁾そうであるが、旧約聖書にヤハウェが豊穡を司る表現が見られること（ホセア書2章，詩篇65：9-13など）、以下に見るように鉄器時代IIB-C期に男性神と「生命の木」の関連性が強まることを考えると、後者のほうが可能性が高いように思われる。⁽²¹⁾

そうすると、鉄器時代I期-IIA期に現れる印章や土器の「生命の木」の図像もどの神と関連づけられていたのか明確でなくなる。図像そのものに直接女神を示す要素は認められないからである。それ以前の伝統との関連で考えるとカナンの豊穡女神であろうが、すでにイスラエルの男性神に豊穡的性格は吸収されていた可能性も否定できない。ケール（1998，42）はこの時代の証拠を以下のように整理している。

鉄器時代I期，IIA期に木と擬人化された女神との関係が不明確になることは興味深い。……このことは、これらの女神が消失したことを意味したり、前8-7世紀に擬人化された女神が戻ってくることを排除しないが、聖なる木の象徴がヤハウェやケモシュ、ミルコムなどそれと類似した神々

の祝福と関連づけられる道を開いたと言えるであろう。(拙訳)

3. 鉄器時代 IIB-C 期 (イスラエル王国時代, 前 9-6 世紀)

前 9 世紀に始まる鉄器時代 IIB-C 期は, すでにイスラエル民族による南レヴァント支配が確立し, 北王国イスラエルと南王国ユダが形成された時代である。「生命の木」を表す遺物は引き続き多くないが, ケールは特徴的な現象としてこの図像が男性神と結びつけて描かれるようになったことを指摘している。その証拠は以下のような例である。

1. ハツォル VI 層 (前 8 世紀) 出土の骨製把手 (図 8-a)。これには 4 つの羽根を持つ男性がナツメヤシの木を握る図像が描かれている。この男性を厳密に同定することは難しいが, ケールはバアル系統の男性神として⁽²²⁾いる。
2. テル・エン・ナスベ, アクジブ等出土のスカラボイド (例, 図 8-b)。これらには, 中央のナツメヤシの木のまわりで踊る男性たちが描かれており, これまでと異なる新しい図案だと考えられる。キプロスでは木を中心に踊る人物たちの土製模型も知られており, ケールはこのような図像と後に豊穣を司るようになる「森のアポロ・ヒュラテス神」崇拝につながりがあった可能性を指摘している (1998, 43)。⁽²³⁾
3. ベト・シャン, テル・エッサイディエ出土の円筒印章 (前者年代不明, 後者前 8 世紀, 図 8-c)。前者には, 座ったエル型式の男性神の前に「生命の木」が描かれている。人物には髭があり, あきらかに男性であるが, その前にかもしか, 木, ケルビム等が描かれている。後者も同様の人物像の前に積み重ねられたパン (?) と魚, 三日月と生命の木が描かれており, 女神を表す要素は見られない。
4. キプロス出土のスカラベ (例, 図 8-d. キティオン出土)。

これらは鉄器時代 IIC 期出土のものであるが, 3. 同様「生命の木」の前に座った男性神が祝福の姿勢で手を挙げている姿が描かれている。

このようなケールの証拠は, この時代の「生命の木」の図像があまり多くなく, 使用される場合にはむしろ男性神と結びついて表現されるようになったことを示している。女神との関連性を示す例はまったく見られない。こうした現象は, タアナク出土の祭儀台との関連から考えると, カナンの女神の豊穣的性

格がヤハウェの属性の一部として取り込まれ、「生命の木」がヤハウェ自身の祝福の象徴として理解されるようになった可能性を示していると言えるであろう。

こうした解釈は、ジオヴィーノ（Giovino 2007）による新アッシリアの「生命の木」の図像研究からも支持される。彼女は、新アッシリア時代には「生命の木」は木を模した人工的な祭具になっており、神の存在や力を表す象徴としてしばしば男性神との関連で用いられたことを指摘している（2007：17章）。また、「生命の木」は神殿の入口の二本の柱とも関係があり、アッシュル、シャマシュ、シン等の男性神の神殿で用いられていたことも指摘している。

聖書でも、エルサレムのヤハウェ神殿の入口にはヤキンとボアズという二本の柱が立っていたことが知られており（Ⅰ列王記7：21；Ⅱ歴代誌3：17）、これも聖書の描写や南レヴァントから出土する土製神殿模型から類推すると「生命の木」を模していた可能性が高い。そうすると、「生命の木」はイスラエル王国時代にはヤハウェ祭儀に完全に取り込まれていたことになる。また、列王記がエルサレム神殿や高き所にあるアシェラと呼ばれる木製の祭具をたびたび非難している点（Ⅰ列王記14：23；Ⅱ列王記21：7；23：6-7等）⁽²⁴⁾も、ヤハウェ祭儀にアシェラ聖木が取り入れられていた証拠となるであろう。何より創世記のエデンの園には「生命の木」があり、それを守るために神がケルビムを置いたという記述（創世記3：24）は、すでに「生命の木」がヤハウェの祝福の属性になりきっていた可能性を示すものと言えるであろう。

以上のように中期青銅器時代IIB期から鉄器時代IIC期における「生命の木」の図像の変遷を見てくると、この図像の存在から単純にイスラエル王国時代にカナンの豊穡女神崇拜が継続していたと言えないことがあきらかである。この図像は、元来豊穡女神のイシュタルやアシェラを表すものとして発達したが、鉄器時代になると女神との関連は急速に薄れ、むしろ男性神との関連が前面に出てくる。これは、鉄器時代になって同じ図像の読み変えがなされたことを意味しており、鉄器時代の土器に数点認められる「生命の木」の図像もそうした環境の中で別の意味を持っていた可能性を考えるべきであろう。

II. クンティレト・アジュルド出土の土器に描かれた「生命の木」と碑文

次に、「生命の木」の図像が描かれた鉄器時代の土器のうち、「ヤハウェとそ

のアシェラ」という表現を含む碑文が記されたクンティレト・アジュルドの碑文をより詳しく検討してみたい。クンティレト・アジュルドは、カデシュ・バルネアの南50km、アラビア半島北部からシナイへ向かう砂漠の交易路の交差点の丘の上に位置する遺跡である。発掘者のメシエルは前8世紀の宗教施設だとしたが、現在は一般にフェニキア、北イスラエル、南ユダなど様々な人々が利用した隊商宿（キャラバンサライ）だったと考えられている⁽²⁵⁾。

この遺跡では、入口のベンチつきの部屋とその壁の裏側から図像と碑文が記されたピトス（大甕）が2点検出されている。そのうちの1点（ピトスA）には、「ベス神のような立った二人の人物と座った豎琴奏者（図9-a）」、「牝牛の乳を吸う子牛⁽²⁶⁾」,「図案化された木とその両側に立つかもしか（図9-b）」の図像が描かれ、もう1点（ピトスB）には「手をあげて行進する5人の人物」が描かれていた。ピトスAの碑文はベス神像の頭に重なって記されており、

brkt. 'tkm. lyhw. šmrn. w'l'srth.

「私はあなた方をサマリアのヤハウェとそのアシェラによって祝福する」という表現が含まれていた。ピトスBの碑文は「行進する人物像」の右側に記されており、

brkth. lyhw tmn w'l'srth.

「私はあなたをテマンのヤハウェとそのアシェラによって祝福する」という表現が含まれていた⁽²⁷⁾。

これらの碑文や図像は、ヤハウェにアシェラという配偶神がいたことを示す可能性があるということで多大な興味をひいてきた。ここでは、まずこれらの図像に女神としてのアシェラが描かれているのかどうか、そしてそれが「生命の木」と関係していたのかどうかを検討してみたい。

発掘者のメシエルは、ピトスAに描かれたベス神と豎琴奏者像は、ベスではなく牝牛（むしろ子牛）と女性座像であるとし、ヤハウェとその配偶神を描いている可能性を指摘した（Meshel 1979, 30）。しかし、実際には子牛とされる人物は二人描かれており、女性座像と合わせると三人になってしまい、配偶神を表すには都合が悪い。また、豎琴奏者はそっぽを向いた形になっており、同一の絵の一部とは思えない。アシェラが音楽や豎琴と関係があったという証拠も存在しない。一方、クーガン（1987, 119）やマッカーター（1987, 146-47）は、二人の立っている人物は牛ではなくベス神だとし、これらがヤハウェとそ

の配偶神だと解釈した。これらの人物に角は描かれておらず、牛は正面を向いて描かれることがほとんどないからである。しかし、ヤハウエやアシェラが位の低いベス神と同一視されるとは考えにくく、やはりこれらの図像をヤハウエとその配偶神と理解することは難しい。また、「ヤハウエとそのアシェラ」という碑文は、このベス神の頭をかすめるように記されており、線の太さもまるで異なる（碑文のほうがはるかに細い）ので、これらの人物の注解である可能性は低い。つまり、これらの人物はどう見てもヤハウエとその配偶神とは理解できず、この図像から碑文のアシェラを女神であるとすることもできない。

また、ピトスAの「生命の木」の図像も碑文と反対側に描かれているので、碑文のアシェラがこれに直接言及しているとは考えにくく、二人のベス神像と関係していたとも考えられない。実際、この壺の碑文と図像はそれぞれ異なったタッチ（線の太さ）で重なり合って描かれており、方向もばらばらである。ヘイドリー（2000, 154）は、これらがすべて同時期に描かれたと考えることは不可能で、キャラバンサライを訪れるさまざまな人々が異なる状況で記したものであるとしたが、この意見に同意せざるを得ないであろう。「生命の木」の図像そのものにも、前節で見た中・後期青銅器時代の例のように女神との直接の関係を示す要素は認められない。

テイラー（Taylor 1993, 217-18）は、ピトスBに描かれた「行進する人物像」の先にある円盤を太陽と理解し、ヤハウエを太陽神として礼拝する姿が表現されているとした。この解釈は確実でないが、たとえ正しかったとしても、この図像にもアシェラや配偶神は描かれていない。

すなわち、クンティレト・アジュールの壺には、どのような形でもヤハウエとその配偶神の図像は存在せず、「生命の木」も女神と理解しなければならない根拠はないことになる。

一方、これらの碑文自体が「ヤハウエとその配偶神アシェラ」の存在を表している⁽³⁰⁾と考える研究者もいる。しかし、文法的にヘブル語では神名に人称接尾辞はとれない（たとえば、Emerton 1982; Hadley 2000, 124 参照）ので、この解釈にも無理がある⁽³¹⁾。そうすると、碑文の「アシェラ」はカナンの豊穡女神の名前ではなく、イスラエルの礼拝にしばしば用いられた木製祭具の「アシェラ」を意味していると考えざるを得ない。このため、現在ここにアシェラ女神の存在を見ようとする研究者は、この語が直接女神に言及しているのではなく、こ

の祭具がアシェラ女神を反映していたと考えることが多い。

元来イスラエルにアシェラという女神がいたという考えは、ウガリト文書の発見に起因しており、そこに主神エルの配偶神としてアシラトという女神が記されていたことによる。そのため聖書の記述が再検討され、70人訳聖書や英訳聖書で木（繁み）や祭具アシェラとされてきた章句の何箇所かが女神アシェラを表しているのではないかと考えられるようになった。しかし、聖書中に事実アシェラという女神が記されているのかどうかについては、いまだに見解が分⁽³²⁾かれている。

ヘブル語聖書には全部で40箇所アシェラという語が登場するが、その内女神を意味する可能性がある箇所は6箇所（士師記3：17；Ⅰ列王記15：13//Ⅱ歴代誌15：16；Ⅰ列王記18：19；Ⅱ列王記16：7；Ⅱ列王記23：4-7）である。それ以外のほとんどの章句では、「切り倒す」「立てる」などの表現が用いられており、あきらかに人工の祭具、おそらく「聖木」のようなものを意味していたと考えられる。⁽³³⁾残りの6箇所に関しては、女神とする立場、祭具とする立場からいろいろな解釈が提示されているが、ここでそれらの検討を繰り返しても決着はつかないであろう。しかし、たとえこれらの聖書箇所がすべて女神を意味していたとしても、それは全体の中の少数であり、むしろヤハウエの祭具としての意識が前面に出てきていたと言わざるを得ない。

この点に関して、ヘイドリー（2000、77-78）は興味深い指摘をしている。これら6つの聖書箇所はすべて申命記史家の編集層に認められるので、「護教的（polemical）」な使われ方をしているという点である。すなわち、申命記史家はこれらの祭具を取り除くため、あえてかつての女神との関連性を引き出して批判しているというのである。そうすると、これらの章句が女神アシェラに言及していたとしても、実際の祭具アシェラはすでにアシェラ崇拝から離れ、ヤハウエの祝福の象徴へ変わっていたことになる。⁽³⁴⁾その場合、王国時代にアシェラが事実女神として機能していたことを示す聖書箇所はひとつも存在しないこととなり、王国時代のかなり早い時期からアシェラが独立した女神としての立場を失っていた可能性が高くなるであろう。⁽³⁵⁾

まとめると、クンティレト・アジュルド碑文のアシェラも、壺に描かれた図像同様、女神として理解する必要はないことになる。前10世紀以降のイスラエルに女神としてのアシェラが存在した明確な証拠はなく、これを女神とする読

みも文法的に困難だからである。結局、アシェラは聖木としてヤハウエの祝福を象徴するために用いられていたと考えるほうがはるかに自然であり、この甕の「生命の木」の図像もそれを表したものと解釈すべきであろう。

このような理解は、1. で議論した「生命の木」の図像の描かれ方の変遷とも合致する。また、紀元前1千年紀のフェニキア語、ポエニ語碑文に女神アシェラがまったく認められないという指摘（Lipiński 1972）や南レヴァントの碑文資料中アシェラを神名接尾辞に持つ名前がほとんど存在しない（Tigay 1986）という指摘とも合致する。さらに、申命記史家が偶像崇拜を厳しく非難しているのに対し、預言者によるアシェラ聖木に対する批判が少ない点とも合致する。⁽³⁶⁾

結 論

これら二つの議論から、「生命の木」の図像は、中期青銅器時代ⅡB期から後期青銅器時代には豊穡の女神アシェラ、アスタルト、イシュタルなどの祝福の表象として用いられたが、鉄器時代Ⅰ期頃から女神との関連性は薄れ、むしろヤハウエ祭儀に取り込まれるようになったと考えられる。「生命の木」はカナンの多神教を背景に発達したモチーフであったが、イスラエルが成立すると同時に、他の神々の属性をヤハウエに取り込み、一神教を確立するために吸収されたのであろう。それに伴い、アシェラも独立した女神としての性格を失い、ヤハウエの豊穡的側面を表す祭具へと立場を変え、意味が読み換えられるようになったものと思われる。だからこそ、鉄器時代ⅡB-C期の図像で「生命の木」は男性神と関係して描かれるのである。最終的に、アシェラ祭具や「生命の木」の図像は、遠い記憶にあった女神との関連性のために、排他論者の申命記史家によって排斥された。ただアシェラはヤハウエ祭儀に密接に取り込まれて⁽³⁷⁾いたため、アスタルトほど明確には排斥されなかった。アシェラは近隣諸国においてもすでに消失しており、アスタルトほどの脅威でなかったことも理由であろう。

以上の理解は、筆者が前著（Sugimoto 2008）で示したイスラエルにおける一神教の成立過程のモデルと合致している。筆者は、円盤を持った女性土偶の時代毎地域毎の分布から、後期青銅器時代には戦争の女神アスタルト自身が宗教遺物に描かれたのに対し、鉄器時代Ⅰ期からⅡA期には「太鼓を持った人間

女性」の土偶が「戦勝」の概念を表すものとして用いられるようになり、この概念がヤハウエの属性に取り入れられたことを示した。こうした土偶は最初イスラエル北部やトランスヨルダンが中心だったが、9世紀半ば以降激減し、フェニキアやエドムに中心が移動した。イスラエル成立直後には、積極的に異教的要素を取り込むことで異教的背景を持つ人々がヤハウエ信仰を受け入れやすくし、それらすべてに優越する神としてヤハウエを示そうとしたためだったと考えられる。すなわち、包括的に一神教を形成する試みであった。しかし、前9世紀になると、フェニキアとの関係が緊密化し、独立したアスタルト崇拜が導入されたため、ヤハウエ崇拜の脅威となった。その結果、異教的概念を読み変えによって受け入れるという方針は転換され、抑圧、排斥によって排他的な一神教を形成するようになったというモデルである。

もしこのモデルが正しいとすると、鉄器時代の土器に見られる「生命の木」の図像は中期青銅器時代 IIB 期-後期青銅器時代の豊穡女神崇拜の単純な継続と考えることはできない。これらは、ヤハウエの豊穡的側面を表すために取り込まれ、読み変えられた図像であり、遠い女神の記憶はあったとしても、すでにヤハウエの祝福の象徴として理解されていた可能性が高い。特にエルサレム神殿のすぐ近くからもこのような土器が見つかることは、これらが十分に受け入れられる王国の正統的な信仰だった可能性を示している。「生命の木」の図像は、時代毎の環境によって同じ図像がまったく異なる精神世界を反映するようになることを示す例として非常に興味深いものだといえることができる。

* 本論は、平成21年度科学研究費補助金・基盤研究（B）の成果の一部である。

参考文献

- Ahituv, S. 2006: "Did God Really Have a Wife?" *BAR* 32-5, 62-66
- Amiran, R. 1970: *Ancient Pottery of the Holy Land*, Rutgers University Press
- Beck, P. 1982: "The Drawing from Horvat Teiman (Kuntillet 'Ajrud)", *TA* 9, 3-68
- Beck, P. 1994: "The Cult-Stands from Taanach: Aspects of the Iconographic Tradition of Early Iron Age Cult Objects in Palestine," in I. Finkelstein and N. Na'aman (eds.) *From Nomadism to Monarchy*, Jerusalem
- Choi, G. D. 2008: *Decoding Canaanite Pottery Paintings from the Late Bronze Age and Iron Age I*, Ph.D. Thesis, The Hebrew University of Jerusalem

- Coogan, M. D. 1987 : "Canaanite Origins and Lineage: Reflections on the Religion of Ancient Israel," in P. D. Miller et al. (eds.) *Ancient Israelite Religion*, Philadelphia, 115-24
- Day, J. 2001 : *Yahweh and the Gods and Goddesses of Canaan* (JSOTS 265), Sheffield: Sheffield Academic Press
- Dever, W. G. 2005 : *Did God Have a Wife?: Archaeology and Folk Religion in Ancient Israel* Eerdmans
- Emerton, J. A. 1982 : "New Light on Israelite Religion: the Implications of the Inscription from Kuntillet Ajrud" *ZAW* 94, 2-20
- Epstein, C. 1966 : *Palestinian Bichrome Ware*, Leiden
- Frevel, C. 1995 : *Aschera und der Ausschliesslichkeitansprach YHWHs* (BBB 94), Weinheim: Belz Athenäum
- Giovino, M. 2007 : *The Assyrian Sacred Tree: A History of Interpretation* (OBO 230), Fribourg/Göttingen
- Hadley, J. M. 2000 : *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah: Evidence for a Hebrew Goddess*, Cambridge University Press
- Hestrin, R. 1987 : "The Lachish Ewer and the Asherah," *IEJ* 37, 212-23
- Karageorghis, V. 1995 : *The Coroplastic Art of Ancient Cyprus IV. The Cypro-Archaic Period Small Male Figurines*, Nicosia: A. G. Levantis Foundation
- Katz, H. 2006 : *Architectural Terracotta Models from Eretz Israel from the Fifth to the Middle First Millennia BCE*, Ph.D. Thesis, Hebrew University of Jerusalem (ヘブル語)
- Keel, O. 1998 : *Goddesses and Tress, New Moon and Yahweh* (JSOTS 261), Sheffield: Sheffield Academic Press
- Lang, B. 1983 : *Monotheism and the Prophetic Minority*, Sheffield: Sheffield Academic Press
- Lapp, P. 1969 : "The 1968 Excavations at Tell Ta'anek," *BASOR* 173, 4-44
- Lipiński, E. 1972 : "The Goddess Aṯirat in Ancient Arabia, in Babylon, and in Ugarit," *Orientalia Lovaniensia Periodica* 3, 101-19
- Mazar, A. 2003 : "The Excavations at Tel Rehov and their Significance for the Iron Age in Israel," *EI* 27, 143-60 (ヘブル語).
- Mazar, E. 2002 : *The Complete Guide to the Temple Mount Excavations*, Jerusalem: Shoham Academic Research and Publication
- McGovern, P. E. 1985 : *Late Bronze Age Palestinian Pendants: Innovation in a Cosmopolitan Age*, Sheffield: JSOT Press
- Meshel, Z. 1978 : *Kuntillet 'Ajrud: A Religious Centre from the Time of the Judean Monarchy on the Border of Sinai*, Israel Museum Catalogue 175, Jerusalem
- Meshel, Z. 1979 : "Did Yahweh Have a Consort?" *BAR* 5/2, 24-35
- Schroer, S. 1987 : *In Israel gab es Bilder* (OBO 74), Freiburg: Universitätsverlag/Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht

- Sellin, E. 1904 : *Tell Ta'annek*, Vienna
- Smith, M. S. 2002² (1990) : *The Early History of God: Yahweh and the Other Deities in Ancient Israel*, San Francisco: Harper/Michigan: Eerdmans
- Sugimoto, D. T. 2008 : *Female Figurines with a Disk from the Southern Levant and the Formation of Monotheism*, Keio University Press
- Taylor, J. G. 1993 : *Yahweh and the Sun* (JSOTS 111), Sheffield: Sheffield Academic Press
- Tufnell, O. et al. (ed.) 1940, 1953 : *Lachish II-III (Tell ed-Duweir)*: London: Oxford University Press.
- Tigay, J. H. 1986 : *You Shall Have No Other Gods: Israelite Religion in the Light of Hebrew Inscriptions* (HSS 31), Atlanta GA: Scholars Press
- Winter, U. 1983 : *Frau und Göttin*. (OBO 53), Freiburg/Göttingen
- 桑原久男 2008 :「イスラエル、テル・レヘシュ遺跡2007年（第二次・第三次）発掘調査」『考古学が語る古代オリエント——第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 97-102
- 杉本智俊 2009 :「古代イスラエルの宗教関連考古遺物と一神教の成立過程」市川裕他編『宗教史とは何か（上巻）』リトン, 229-266

注

- (1) この図像の描き方にはさまざまなヴァリエーションがあるが、この地方ではおそらくナツメヤシを描いたこのような図像が一般に「生命の木」と理解されている。詳しい定義に関しては、チョイ (Choi 2008, 73-102), アミラン (Amiran 1970, 161-165) 参照。エプスタイン (Epstien: 1966) は、この種の土器はミタンニ文化と関係しているとした。
- (2) タフネル (Tufnell 1953, 264) は、この現象を以下のように表現している。「後期青銅器時代の豊富で変化に富んだ彩色装飾及びペリシテ土器の精緻なモチーフがあった後、鉄器時代の第二期にこの伝統がこんなにも完全に消失することは不思議である。」(拙訳)
- (3) テル・レヘシュ出土の土器は、本論で扱う3点のうち唯一鉄器時代Ⅰ期のものである。海岸平野やエズレルの谷では鉄器時代Ⅰ期にも後期青銅器時代の土器の伝統が残ったことが知られているが、山地やトランスヨルダンではすでに鉄器時代の文化が始まっていた。注6であげる3つの条件から考えると、この例は他の鉄器時代Ⅱ期の土器の状態と類似しており、ここでは後者に属するものとして扱う。
- (4) この土器は、ヘロデ神殿に向かう大階段の南側に位置する鉄器時代の城門とされる建物の部屋から出土している (E. Mazar 2002, 3-15; 特に5上の図参照)。厳密な位置や土器の年代そのものは示されていないが、ここではこの建築の年代からこの土器も前7世紀としてある。
- (5) 最近の著作としては、ディーヴァー (Dever 2005) を参照。この見解は、アヒト

ゥヴ (Ahituv 2006) によって厳しく批判されている。また、こうした理解から、イスラエルで一神教は捕囚期後まで明確化されなかったという説は B. ラング (Lang 1981) によって広められた。

(6) 後期青銅器時代の土器と鉄器時代の土器に見られる「生命の木」の図像を同一視することには、以下の点からも慎重になるべきだと思われる。

1. 後期青銅器時代の例は基本的に彩色されているのに対し、少なくとも 1, 2 の鉄器時代の例は刻線されている。
2. 「生命の木」の図像は、後期青銅器時代にはクラテルや移動可能な小型の壺に描かれることが多かったのに対し、鉄器時代Ⅱ期の例はみな大型の甕に描かれている。
3. 「生命の木」の図像は、後期青銅器時代の土器にはかなり頻繁に見られるのに対し、鉄器時代にはきわめて稀である。

(7) ケール自身は、前期青銅器時代-中期青銅器時代ⅡA 期, 中期青銅器時代ⅡB 期, 後期青銅器時代, 鉄器時代Ⅰ期, 鉄器時代ⅡA 期, 鉄器時代ⅡB 期, 鉄器時代ⅡC 期と、考古学的編年に従って主たる証拠をカタログ化して論じている。しかし、結果として「生命の木」の表象世界は、中期青銅器時代ⅡB 期-後期青銅器時代, 鉄器時代Ⅰ-ⅡA 期 (前12-10世紀), 鉄器時代ⅡB-C 期 (前 9 世紀以降) の 3 つの大きな時期にまとめられることが示されているので、ここではそのようにまとめて紹介する。

(8) 中・後期青銅器時代の貴金属性ペンダント全般については, McGovern (1985) を参照されたい。

(9) この女性像は、冠、山の描写及び類似する図案から女神と判断する。

(10) これらはアフエク、キブツ・ラヴァディム、テル・ハラシムから出土している。アフエクの例に関しては, Beck 1986, 29-34 参照。他の 2 例に関しては, Keel 1998, fig. 51 参照。

(11) ヘストリン (Hestrin 1987, 220) は、女神の名前エラトが「生命の木」の直上に来るように記されていることに注目している。

(12) マリやウルでは、イシュタル、イナンナが中心的女神として豊穣的属性も受け持っていたが、ウガリトやカナンではアシラト (アシェラ) が豊穣女神として機能していたので、あるいはアスタルト (カナンにおけるイシュタル) は豊穣的属性が比較的弱かったのかもしれない (Sugimoto 2008, 80)。しかし、女神の名称に揺らぎがあったとしても、ここでも「生命の木」と豊穣の女神の関連は示唆されている。

(13) チョイは、その論文で3225点の出土例を分析している。この時代、カナン都市はエジプト新王国の支配下に入り、疲弊したためか高価な貴金属製のペンダントは多くないが、それでも数点知られており (McGovern 1985 参照)、円筒印章にも同様の図像が継続的に現れる。

(14) シュロアー (1987, 39-40) は、「生命の木」の枝がしばしば三角形に描かれているのは、女性器に似せたためだと指摘しており、これも豊穣表現のための手段だった

可能性がある。

- (15) たとえば、チョイ (Choi 2008, II 章, IV 章) は把手に描かれる「ユニオン・ジャック」模様も「生命の木」が退化したものであると指摘している。また、対の動物の片側だけが描かれたり、水だけが描かれたりする場合もある。
- (16) この図案は、中期青銅器時代の土器にはほとんど見られない。
- (17) タアナク、メギドはエズレル平野周辺、テル・エル・ファラ (南) は海岸地域に位置する。
- (18) 多数のはりつけ装飾が施された祭儀台は、タアナクから2点出土している。それぞれラップ (1969) とゼリン (1904) が報告しており、ここで扱っているのはラップが発見したものである。
- (19) テイラー (Taylor 1993, 3 章) の議論を参照されたい。
- (20) ただし、最下段の女性像に一切神性を表現する要素 (ハトホル女神の髪型や冠、装身具、山、星など) が見られない点は、これが豊穡という概念だけを表しており、女神を表現していない可能性を示している。
- (21) ゼリンが発見した祭儀台はより粗雑に作られているが、ライオンとケルビムが交互に4段を形成している点、「生命の木」とかもしかの図像が現れる点でラップのものと共通している。こちらには蛇をつかむ男性像が側面に描かれており、男性的側面が表わされている点も共通である。ベック (1994, 356-358) はこれが豊穡女神、ケールとユーリンガー (1998, 154-157) はアシェラとバアルを表現しているとしているが、ヘイドリーはヤハウェとアシェラを表していると主張している (2000, 179, 187)。ゼリンの祭儀台のほうが解釈はさらに難しいが、ここでも男神と女神両方の要素が見られる点は興味深い。

一方、トランスヨルダンのペラでは、前9世紀になってからも木と女神に関連した祭儀台が使われており、地域差があったことが推定される。ヨルダン川をはさんでペラと対面するテル・レホブからもペラのものとよく似た祭儀台 (前9世紀) が出土しており、発掘者の A. マザール (2003, 159) は、ベト・シャンの谷周辺は他の地域よりも長くカナンの伝統が残ったと指摘している。

また、この種の祭儀台自体、鉄器時代初期に極めて特徴的な遺物である (Sugimoto 2008, 89-93 参照)。祭儀台に関する最近の総合的研究としては、H. Katz (2006) 参照。

- (22) この人物には、女性描写に典型的な乳房や長い髪が認められない。これをバアル系の神とする解釈は確実とは言えないと思われるが、男性がヤシの木とともに描かれていることは否定できないであろう。
- (23) これらの例に関しては、Karageorghis, V. 1995, pl. LXXVIII 参照。
- (24) 本論後半の議論を参照されたい。
- (25) たとえば、ヘイドリー (Hadley 2000, 106-120) は、この遺跡が砂漠の交易路に立地し、在地土器が見られないことから、定期定住者がいなかった可能性を指摘している。また、典型的な祭祀用土器が見られず、建築も当時の神殿に並行例がなく、むしろ

カデシュ・バルネアの要塞に似ていることから神殿でもなかったとしている。この遺跡で検出された碑文には複数の神々への祈りや請願が認められるので、この点からも特定の神の神殿とは考えられない。

(26) 「生命の木」の下にはライオン像，土器の屈曲部の上には馬(?)，猪，熊の像も描かれている。詳しくは，Beck 1982 参照。

(27) ピトス A の全文は *'mr '...h...k. 'mr. lyhl[ʔ] wlyw'sh. w...brkt. 'tkm. lyhwsh. šmrn. ul'srth*。「Xは言う。ヤハレ[レル]とヨアサと[Zに]言え。『私はあなた方をサマリアのヤハウェとそのアシェラによって祝福する』」，ピトス B の全文は *'mr 'mryw 'mr l'dny hšlm. 't brktk. lyhwsh tmn ul'srth. ybrk. wyšmrk wyhy 'm. 'd[n]y...k*「アマルヤウは言う。私の主人に言え。『あなたは元気ですか。私はあなたをテマンのヤハウェとそのアシェラによって祝福する。主があなたを祝福し，あなたを守り，私の主[人]とともにおられますように……』」である。

(28) ヤハウェはともかくアシェラが子牛で表わされる例はほとんど存在しない。

(29) 筆者は，結果的に碑文のアシェラと「生命の木」は同じもの，ヤハウェの祭具としての聖木を表現していると考えるが，これはあくまで別々に書かれたものの偶然の一致である。碑文のアシェラを女神と理解し，この図像との一致から，この時代に女神アシェラが「生命の木」で表現されていたとすることはできない。

(30) 注31の文献を参照。

(31) *šrth* に関するその他の解釈の可能性については，Dietrich and Loretz (1992, 96-97) 参照。しかし，ほとんどの研究者は，人称接尾辞がとれないという理解を認めている。

(32) たとえば，アシェラが女神として存在したことを認めるデイ (Day 2001, 42-48) と認めないマーク・スミス (Mark Smith 2002², 125-133) の議論を比較されたい。両陣営の他の研究者の立場や文献についても，これらの書の議論に詳しい。

(33) 申命記史家はアシェラを批判しているのに対し，王たちはそれを建立したと言われていることから，多くの研究者は聖木としてのアシェラが一時は正当なヤハウェ祭儀の一部として認められていたと考えている (たとえば，Mark Smith 2002², 108-110 参照)。

(34) ヘイドリー自身 (2000, 80)「女神アシェラとしてのアイデンティティを徐々に失いつつあった」という可能性を考えている。

(35) ただし，ヘイドリー自身は王国時代にアシェラはまだ女神として理解されていたとする。

(36) イザヤ17:8; 27:9; エレミヤ17:2; ミカ5:13の4か所しか存在しない。

(37) ヤキンとボアズ，エデンの園の描写等にその痕跡は残っている。

図1. 後期青銅器時代の土器に描かれた「生命の木」

- a. メギドVII B層出土土器 (Amiran 1970: fig. 50-7)
 b. ラキシ壕の神殿出土土器 (Tufnell 1940: pls. 51. 287; 60: 3)

図2. 鉄器時代出土土器に見られる「生命の木」

- a. テル・レヘシュ (筆者撮影); b. エルサレム (E. Mazar 2002: 13 右上)

図3. 中期青銅器時代IIB期に見られる「生命の木」の図像

- a. テル・エル・アジュール出土の金箔製ペンダント (Keel 1998: fig. 17);
b. ヒクソス・スカラベ (Keel 1998: fig. 22)

a.

b.

c.

図4. 中期青銅器時代IIB期以前の「生命の木」の図像

- a. マリ, イシュタル神殿壁画 (Keel 1998: fig. 8)
b. マリ出土の円筒印章 (Keel 1998: fig. 7); c. ウル出土の円筒印章 (Keel 1998: fig. 3)

図5. 後期青銅器時代に見られる「生命の木」の図像
 a. ウガリト出土の象牙製蓋 (Keel 1998: fig. 43)
 b. ハトホル女神の髪型をした女性土偶 (Keel 1998: fig. 52)

図6. 鉄器時代I期に見られる「生命の木」の図像
 a. タアナク出土の印章 (Keel 1998: fig. 66);
 b. メギドVIA層出土の彩文土器 (Keel 1998: fig. 68)

a.

b.

図7. 鉄器時代IIA期に見られる「生命の木」の図像

- a. ベテル出土のスカロボイド (Keel 1998: fig. 72);
- b. タアナク出土の土製祭儀台 (Keel 1998: fig. 71)

図8. 鉄器時代IIB-C期に見られる「生命の木」の図像

- a. ハツォルVI層出土の骨製把手 (Keel 1998: fig. 79); b. テル・エン・ナスベ出土のスカラボイド (Keel 1998: fig. 80); c. ベト・シャン出土の円筒印章 (Keel 1998: fig. 90); d. キティオン出土のスカラベ (Keel 1998: fig. 93);

図 9. クンティレト・アジュルド出土の甕に描かれた碑文と図像

a. ベス神像と碑文 (Beck 1982: fig. 5)

b. 図案化された生命の木 (Beck 1982: fig. 4)